

# 編集委員

## インタビュー

# 歴史の宝庫 尽きない発見

城郭研究家

本岡 勇一さん(49)に聞く

もとおか・ゆういち 1969年生まれ、兵庫県稲美町出身・在住。県立東播磨高、近大法学部卒。92年、ビジネスアプリ開発のユーザックシステム。趣味の城郭研究で多彩に活動する。



兵庫県立明石公園(撮影・後藤亮平)

### 兵庫は「お城県」、城跡巡りの楽しみは?

「兵庫はお城、日本一」。兵庫県が今年の観光キャンペーンで掲げるテーマだ。県内の城跡の国指定史跡は、世界文化遺産・国宝姫路城(姫路市)をはじめ、国内最多の22カ所。城ブームにあつて、明石城(明石市)の築城400年や尼崎城(尼崎市)の再建など、話題は尽きない。稲美町の会社員で、城郭研究家の本岡勇一さんは「ほんの少しの冒険心とあらん限りの想像力で、城の景色は変わる」と話す。(佐伯竜一)

「お城愛、半端ありませんね。兵庫県は、お城県なんです。お城、つまり城郭とは外敵の侵入を防ぐ構造物のこと、県内では姫路城や天空の城・竹田城(朝来市)が名高いが、南北朝や織豊政権にゆかりの城、江戸幕末の台場など、あらゆる時代の特徴が見られます。また山城、平城、石垣の城、土の城と実に多様で、兵庫の旧五国はバラエティーに富んだ日本の縮図と言えます。自然崩落が止まらない哀愁の利神城(佐用町)、引き潮の時だけ石垣が姿を現す高崎台場(洲本市)、復元整備で進化する赤穂城(赤穂市)」。千数百あるうち、千カ所ほどは回ったろうか」

「2018年の著書『ひょうごの城めぐり』(神戸新聞総合出版センター刊)で、現地取材を基にした散歩のつづを紹介しています。あらためて、城の魅力は。多くの日本人にとって、城はあがめ、たてまつる対象でした。人の生き死にの場であり、建物や石垣、堀など、往時の最高技術が用いられた。思えば、重機もない時代にあれだけのものを築いたことは驚異的だ。現代人でも、その能力の高さを再認識できるのではないか。地域のシンボルとして誇り、守りたい」

「それでいて、天守に上れば達成感を満たしてくれる存在でもある。地形や遺構から『当時はこうだったのかな』などと、想像するのが楽しい。武者の気持ちになり、時に攻め、時に守る視点でいろいろな方角から迫る。城主の子孫や歴史愛好家から、秘話を教えてもらえらることも。春のサクラ、夏の緑、秋の紅葉、冬の雪景色と、季節に応じた趣が変わる。訪れるたびに発見があります」

「城にひかれたきつかけは?」

「30歳ぐらいのころ、但馬を下ライブして山の上の石垣に気が付いた。登ったら『竹田城』とある。眼下を見晴らす考えられないような高い場所に、壮大な石垣群が張り巡らされていた。何だ、これは。ほかに誰もおらず、座り込んで見入った。自分でもどこにひかれるのか分からなかったが、わくわくした。城跡って、見どころが多いのかもしれない。城巡りをしてみようと思いました」

「自宅の近くに、羽柴秀吉にゆかりの三木城(三木市)があった。周辺には戦時に築く『陣城』や土塁が残り、山道に生い茂る草をかき分けて訪ねた。地域の隠れた財産を発信できないかと、散策の成果を伝えるサイトを立ち上げた。同じ趣味の仲間とつながり、一緒に城を回ってトークイベントを開いた。落語家の春風亭昇太さんとも知り合い、テレビや雑誌の仕事も入るようになりました」

「本業は、ビジネスアプリを開発する会社員です。『自治体の観光振興を支援しているが、趣味を生かさない手はありません。古地図などを基に、城跡でスマホをかざすと、かつて実在したであろう建物群の3DCGが現れるシステムを開発し、3月には明石城版を公開しました」

「城は多くの地域にあり、城を生かしてにぎわいを創出できると唱えておられます。『観光客の受け入れでは、地元住民の協力が欠かせない。』『ようこそ、おらが城に』と、登山道を整備し、歴史を紹介するボランティアの存在が城を次の世につなぎ、地域に活気をもたらす。外国人観光客にも興味を持つ向きは多く、ガイドの本やアプリを作ったり、城攻めゲームのソフトを開発したりするのも方法でしょう」

「だまされたと思って、城を訪ねてみてください。明石城の東西380mに及ぶ直線の石垣など、見慣れたつもりも光景にも、まだまだ発見は潜んでいるはずです」

### 記者のひとこと

全国に約5万ある城のうち3千カ所ほど訪ねたそう。「風のない日はこの池に逆さ明石城が映るんです」と教えてもらい、10歳の息子を連れて行き「パパ、すごいね」と言われた。確かに、城好きはやめられない。

2019年4月21日発行  
神戸新聞 第7面